明治大正
文學全集
44

明治大正文學全集

第四十四卷

小久保山米
内正薫雄

著

（非賣品）

明治大正文學全集・第四十四卷・第三十六回配本

昭和五年五月十二日印刷
昭和五年五月十五日發行

著作代表者　久米正雄

發行者　東京市日本橋區通三丁目八　和田利彦

印刷者　東京市日本橋區通三丁目八　木呂子斗鬼次

發行所　東京市日本橋區通三丁目八　春陽堂
電話日本橋五四一一
振替東京一六一七八

製版所　常磐印刷所
印刷所　共同印刷株式會社
製紙場　富士製紙株式會社
製本所　高崎製本所
裝紙布地　生田商店
製箱所　中田製箱所
口繪印刷所　早川印刷所
單印刷所　竹田印刷所
見返印刷所　塚本印刷所

明治大正文學全集　第四十四卷　目次

小山内薫篇

著者筆蹟……（扉裏）

大川端……三

著者肖像（卷頭）

久米正雄篇

著者筆蹟……（扉裏）

破船……一八三
受驗生の手記……四四一
敗者……四八五
良友惡友……四九八
大人の喧嘩……五〇九
虎……五二六
金魚……五三四
山鳥……五四一
解說（久米正雄）……五五一
著者近影（卷頭）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

小山内薫篇

いふづまや　別荘の
いたと　閑ざ　さ　ま　て　　秀

大川端

小山内薫

一

今から七年前――丁度日露戰爭が濟んだ年の秋だつた。久松町の明治座に愛國婦人會の慈善演藝會が三日ばかり催された事があつた。

その二日目に正雄は龍閑橋の伯父さんに連れられて、見物に出かけた。菊の匂の何處からともなく漂つて來るやうな如何にも好い日和で、正雄の制服姿も正雄の伯父さんの唐棧拵へも秋の日を受けて鮮かに光つた。

明治座へはひると、白襟に細い金鎖をかけて裾模樣を著た貴婦人といふ人達が、赤だの白だの紫だののリボンを胸につけて、頻に廊下や棧敷を彳旋して歩いてゐた。

正雄は伯父さんとたつた二人で一間の土間を占領した。伯父さんが芳町方面への義理で引受けた切符の數は四枚だつたが、外に來る人が誰もなかつたのである。

「菊畑」の芝居があつた。智惠内はその時分の莚升、鬼一はその時分の時藏、丹海は先の肥つた荒次郎だつた。紙で拵へた黄菊白菊、白と藍との市松の日除障子、青竹の床几、智惠内の銀の毛拔、鬼一の鳩杖、皆鶴姫の赤い袂、かういつた色と形とは芝居好きな正雄を喜ばせた。

併し、この日は芝居よりも正雄を喜ばせたものがある。それは芳町のお酌の踊であつた。本花道と假花道から揃ひの友禪を著て、揃ひの銀のぴらぴらを挿したお酌が八人宛出て、聯隊旗をかいた團扇太鼓を一緒に鳴らしながら、元祿踊式に手足を揃へて踊るのである。

正雄は子供の時分から團十郎や菊五郎の踊を見てゐるし、藤間や花柳の好い師匠の踊も見てゐるので、まだ身體の自由に動かないお酌などの踊を見て感心するわけはないのである。正雄が喜んだのは唯綺麗だからであつた。

正雄は山の手の或藝者屋町で育つた。正雄の育つた屋敷は藝者屋や待合で取り卷かれてゐた。彼は子供の時から藝者やお酌は澤山に見た。けれども、その邊の藝者やお酌は正雄の心に何等の夢想をも起させなかつた。正雄は彼等を下女のやうに見もし思ひもして來たのである。

はじめて見た下町のお酌。しかも名に聞いた芳町の、中でも美しいのをすぐつたのでもあらう。兩花道を合せて十六人、賑かな鳴物に拍子を合せて、美しい顏を赤らめもせず、三十二の袖を纐纈(びらめ)かすまばゆさ。

山の手のそれとは彫が違ふと思つた、繪の具が違ふと思つた。さう思ひながら、正雄は兩肱を間狹に凭せて、瞬きもせず左右を交る交る見た。

兩方から來たお酌達は、舞臺で入れ違ふと、一齊に後向に坐つて肌を脱いだ。縮緬の襦袢にも聯隊旗の模樣が赤く染めてあつた。

踊つ子はてんでに小さな日の丸の旗を持つて、又一踊り踊るのであつた。

正雄は上手から三番目にゐたお酌を中でも一番美しいと思つた。

髪の毛が黑く豐であつた。鼻の高きに過ぎないのも愛嬌があつた。夢を見てゐる人のやうな口元。黑眼勝な利口さうな眼。態度が愼ましやかなので、丈の高いのも憎げではなかつた。

正雄は自分の趣味を殆んど理想的にこのお酌から汲み取る事が出來た。正雄は一旦このお酌に眼をつけてからは、他のお酌には眼もくれずに、唯この一人をのみ見詰めてゐた。再び斯かる機會は無いと思つたのである。この貴き機會を出來得る限り長く深く味はうとしたのである。

正雄はプログラムを廣げて、そのお酌の名を求めた。けれどもプログラムには唯大勢の名が列んでゐるばかりで、どれが誰だか容易に分からなかつた。正雄は伯父さんに聞いて漸くこのお酌の名を知つた。お酌は新河内家の君太郎といふ、かなり格の好いのであつた。

君太郎の姿は深く正雄の腦裏に刻まれた。正雄は家へ歸つてからも、容易に君太郎を忘れる事が出來なかつた。本を讀んでゐる時も、何か書いてゐる時も、君太郎の眼が始終自分を見てゐるやうに思はれた。

正雄は家にある古い文藝倶樂部を藏から澤山出して來て、一册一册口繪を調べた。殆ど一日掛りで漸く君太郎の寫眞を二枚見つけた。一つは元祿姿をして手に櫻の枝を持つたのである。これは何かの踊の時に撮つたのであらう。一つは恰好の惡い洋服を著て薔薇の匂を嗅いでゐる所である。これは著物を借りて道樂に寫したものであらう。

この二枚の寫眞は少しも正雄に滿足を與へなかつた。正雄の腦裏に刻まれた君太郎の姿氣は、少しもこの二枚の寫眞には出てゐなかつたのである。

丁度藝者やお酌の繪葉書に下手な彩色をしたのが盛に賣り出される時分だつた。正雄は下町へ出る度に君太郎の繪葉書を漁つた。

襷を掛けて、姉さん冠りをして、箒を持つてゐるのがあつた。

同じ姿で洗濯をしてゐるのがあつた。

ハイカラで机に向つて手紙を書いてゐるのがあつた。丸髷に結つて裁縫をしてゐるのがあつた。

中でも正雄の氣に入つたのは、頭をハイカラに結つて、陰矢絣の透綾を着て、麻の葉絞りの帶を締めて、しとやかに三つ指を突いた寫眞であつた。この寫眞に映つて居る君太郎の眼は、如何にも世にへり下つた、少しも思ひ上がるところのない眼であつた。

正雄は君太郎に繪端書の種類の多いのを喜んで、暇さへあれば新しいのを探して歩いた。

正雄の家は家内中芝居とか音曲とか踊とかいふものが好きで、色々な藝人が始終出はひりもしてゐたし、正雄自身も芝居の研究が目的で、自分と同い年位な役者とも友達づきあひをしてゐたのだが、おつ母さんがひどく嚴しいので、まだ惡所とか盛り場とか言ふ所へは一度も足を踏み入れた事がなかつた。

從つて、正雄は君太郎を世にも愛しい者には思つたが、これに近づく手段などを講じた事は一度もなかつた。これに近づく手段があらうなどとは夢にも思はなかつたのである。

正雄は堅氣の娘を慕ふやうな心持で、君太郎を慕つたのである。正雄は唯繪端書の一枚一枚と殖えて行くのを樂みにした。

次の年の夏に、正雄は學校を卒業した。學校を卒業すると、龍閑橋の伯父さんの世話で中洲の或芝居へ作者見習としてはひつた。勿論無給金で、交際費は自分から持ち出すのである。

正雄は芝居のあいてゐる内は、毎晩毎晩遠い寂しい山の手から車だの電車だのと色々に乘り繼いで、この大川の川下の、淫らな島へ通ふのであつた。

中洲の芝居の左側には銘酒屋のやうなものが幾軒か列んでゐた。白粉を眞白に塗つた女が長火鉢の前に寢そべつてゐたり、門口へ出て帽子のない男と立話をしてゐたりした。

芝居の右側には待合が列んでゐた。立派な門構で供待などの出來てゐるのもある。いきなり格子戸で、長火鉢や階子段が外から見えるやうなのもある。夜になると電話が方方でちりんちりん鳴る。美しい女を載せた車が、好い匂ひを振り撒きながら、頻に出たりはひつたりする。

芝居の中は更に艶かしかつた。

魚河岸の美しい娘で、毎晩のやうに來るのがあつた。役者は入れ交り立ち交りそこへ挨拶に行つた。中には暫く一緒にはひつて、自分の仲間のしてゐる芝居を見てゐるのもあつた。この河岸の娘と張り合つて、外神田から來る請負師の娘があつた。ここへも役者が幾人も挨拶に來る。娘の場

所は水菓子だのお菓子だのの使ひ物でいつも狹くなつた。若い藝者も澤山に來た。東の棧敷の藝者と西のうづらの藝者とが手の暗號で話をする。扇子を口へ當てて艶かしく笑ふ。

舞臺の役者も特に見物の一人の顏を見て、笑つたり妙な眼つきをしたりした。役者の眼の行く所にはきつと若い女がゐた。

その頃は樂屋内がまだそんなに嚴しくない時分だつたから、河岸の娘や外神田の娘は、よく茶屋の男に案内されて、座長の部屋へ來た。そして、座長が大きな鏡に向つて、兩手でべたべた顏を拵へるのを飽きずにいつ迄も眺めてゐた。下廻りには又下廻りで、樂屋の階子段の下まで來て待つてゐる女があつたり、裏口の暗い所で手招きをしてゐる女があつたりした。

正雄は毎晩のやうに待合の名や藝者の名を耳にした。今夜は何處へ行くの、明日は何處だのと言ふ話ばかり聞いた。

二

その頃この芝居へ毎日のやうに來る男の客に木場の或る若旦那があつた。いつも芝居は碌に見ないで、茶屋からずつと樂屋へ通つて、役者の部屋を方々訪ねて歩いてゐた。時には大部屋の眞中に胡坐をかいて、下廻りを相手に冗談を言つてゐた。床山の部屋へ腰を掛けてゐる事もあつた。狂言部屋に坐つてゐる事もあつた。極めて地味な——金が掛つてゐて人眼につかない——裝をしてゐて、懷にはいつも澤山金を用意してゐた。

芝居がかぶると、きつと三四人役者を連れて、何處かへ飲みに行く。取卷の藝者を呼んで、寂のある咽喉で一中節を語つて聞かせる。そして役者には一々祝儀を出す——一旦座敷へ呼んだ以上は毎日でも唯は返さないのである。座長と座長の相手をする女形とはこの人から毎晩のやうに何處かへ呼ばれた。

この人の芝居に於ける勢力は豪いものだつた。口番、樂屋番から、大道具、小道具に至るまで、この人を「旦那、旦那」と崇めてゐた。この勢力には流石に河岸の娘も外神田の娘も敵はなかつた。役者は屢々婦人の方を斷つて、この人の座敷へ來た。

一座の愛嬌者に龍井浪二郎といふ役者があつた。元は河岸の魚屋であつたのが、道樂からこの商賣になつたのであつたが、今では三枚目の藝が熟して、一座になくてならぬ人になつてゐた。この龍井が殊にこの旦那の贔屓で、何處へ行つて誰を呼ぶ時でも、この男を缺かした事はなかつた。

或晩、この龍井が正雄を小蔭に呼んで、木場の旦那が是非一度あなたに會ひたいと言つてゐるが、會つてくれるか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

と言ふ。正雄は幾度も顔は見てゐる人だが、まだ一度も正式に名のり合つた事がないから、一度ゆつくり話がして見たいと思つてゐたんだと答へた。實は今日會はせたいんだが、今日はゆつくりと言ふわけには行かない。この幕合に一寸行くんだからと龍井が言ふ。では、それでも好いが、一體何處へ行くんだと言ふと、つい濱町の岡田だと言ふ。

その晩は雨が降つてゐた。二人は帽子も冠らずに、相合傘で芝居の裏口を出た。正雄は料理屋といふものも、まだ好く知らなかつた。物心が附いてからで覺えてゐるのは、十一の歳に龍閑橋の伯父さんに連れられて講武所の何とか言ふ家へ一度行つた時の事である。その時正雄は手水に立つて、手を洗ふ時、藤色の著物を著たお酌に水を掛けて貰つて、眞赤になつたのである。その時分から見れば、見聞や讀書で、もう大分度胸は出來てゐたが、それでもまだ中中氣味が惡かつた。

木場の若旦那——姓を福井と言つた。屋號はカネ德——は六枚折の金屏風を立て廻らして、肥つた、顔の艶々した、頭の毛の薄い、紋附の羽織を著た五十位の男の人と二人で厚い座蒲團に坐つて、高坏のやうな一本足の膳を前にして、笑ひながら盃を口にしてゐた。藝者は年寄つたのが三人來てゐただけであつた。

正雄は龍井の引合せで、始めて福井さんと名のり合つた。隣にゐるのは、多分後見か番頭だらうと思つて、正雄は丁寧に挨拶をした。

正雄はその時二十六だつた。福井さんも二十六だつた。同い年だといふ事が大層福井さんを喜ばせた。

正雄は龍井と一緒に直ぐ席を辭した。芝居へ歸つて聞いたら、福井さんの隣にゐたのは辨中といふ太鼓持だつた。

正雄は福井さんと段々親意になつた。騷ぐ時はどんな眞面目な人でも騷がしてしまふまでに騷ぐ、眞面目な時ははたでどんな騷ぎをしてゐても、少しも亂されずに落ちついて話すと言つたやうに、青年と老人とを混ぜたやうな福井さんの性質が、ひどく正雄の性癖に合つたのである。

正雄は毎晩のやうに芝居で福井さんに會つた。福井さんに會ふのが樂しみで芝居へ通ふやうになつた。福井さんの方でも、芝居へ來ると、きつと龍井に「小川君は來てるかい。」と聞くやうになつた。小川は正雄の姓である。

でも、まだ福井さんは正雄をさう方々へは呼ばなかつた。「失禮だ。」と言ふ風に考へてゐたのである。「誘惑になるといけない。」とも思つたのである。

福井さんは正雄とゆつくり話がしたい時は、いつも久松町の八洲亭といふ西洋料理屋か、人形町の玉秀といふ鳥屋へ誘つた。そして成るべく役者の同席を避けた。役者と一

座させる事は正雄に對して禮を失すると思つたのである。

それでも、時々前から日を極めて正式に主立つた役者を招待するやうな時には、きつと正雄を呼んだ。かういふ時には、役者も大抵羽織袴で來た。福井さんはいつでも正雄を自分の隣に坐らせて、役者を二人の左右に列ばせた。何處までも正雄を主人側にするのである。

かういふ事のある度に、正雄は若しや君太郎に會へやしないかと空頼みをするのであつた。けれども福井さんはお酌が嫌ひで、いつも年寄の藝者ばかり呼ぶので、中々さういふ機會には出會へさうにもなかつた。

正雄は段々料理茶屋に親しんで來た。お世辭の好い岡田の上さんにも引合はされた。白い髯の長く美しい百尺の主人にも會つた。小柄で、意氣で、言葉つきの愼ましやかな、一中節の巧い、深川亭の上さんにも會つた。

年寄の藝者にも大分知合が出來た。若い藝者も一人や二人は知つた。けれどもついぞその人達の間に君太郎のキの字も噂をされた事はなかつた。正雄はいつか誰かが君太郎の名を言ふ事があるだらうと思つて、いつも耳を澄まして聞いてゐたが、更にその名の出た事がない。せめて女中の口からでも聞きたいと思つて、女中の話にまで注意するのであつたが、女中も一向その名を口にしない。

もう君太郎はこの土地にゐないのだらうか。あれ程のお酌が一度も話題に登らないといふ筈はない。同性の嫉妬からではないかしら。あんまりおとなしいので話になる種がないのではあるまいか。

正雄は色々に思ひ廻らしたが、自ら人に聞いて見る勇氣はなかつた。

三

盆の芝居の明く三四日前であつた。

一座の役者は朝から芝居茶屋の二階へ寄つて、「子煩惱」の稽古をしてゐた。そこへ木場の福井さんが遊びに來た。

正雄は役目として、座附作者と座長との間に坐つてゐなければならなかつた。そして臺詞の拔差や人物の出はひりに就いて、一々座長の相談を受けるのである。又自分の方からも座長に注意するのである。五分刈頭で、小倉の袴を穿いた、如何にも書生らしい正雄の風采は、艶かしい役者達の間に異彩を放つてゐた。

午後一時頃稽古が取れた。正雄が階子段を降りると、福井さんが下に待つてゐた。

「小川君、今日は何か用があるのかい。」

「いゝえ、臺詞の直しが少しあるのですが、それは夜遣れば好いのです。」

「ぢやあ、一寸附き合つてくれ給へ。涼しい所へ行くんだ

から。」
「何處へ行くんです。」
「まあ一緒に來給へ。」
福井さんは茶屋を出ると、どんどん島の奥の方へ歩いて行く。正雄は怪訝な顔をして、その後から附いて行つた。
男橋を左に見て、まだ奥の方へ行くと、突き當りに路地がある。路地をはひると直ぐ、右つ側に屋根附の意氣な門があつて、曇硝子の丸い軒燈に「新布袋屋」の字が透明に拔いてある。
「君、ここだよ。」
福井さんはやんちやらしく門の中へ飛び込んだ。正雄も眞似をするともなく、敷石を二つ三つ飛んだ。格子戸を明けると、龍井がもう來てゐて、玄關に笑つて立つてゐた。
綺麗に拭き込んだ氣持の好い家だが、何となく天井が低くて、何處へ行つても鼻が支へさうである。下駄を脫ぐと、女中が忙ててそれを下駄箱へ入れた。正雄は不思議に思つた。
福井さんに案内されて、正雄は階子段を上つた。通された二階は次の間附の十疊位な座敷である。
天井は杉の薄い板で、それに胡粉と青とで夕顔の繪が書いてある。窓の下は直ぐと大川で、障子を明けると、眞夏の日に眩めく水と、眠りながら流れてゐるやうな舟が幾艘か見えた。向う河岸には白い藏が眼を射るやうに列んでゐた。
座敷の眞中には桑のちやぶ臺が出てゐた。ちやぶ臺の三方には麻の夏蒲團が敷かれて座蒲團の側に脇息が一つ宛置いてあつた。
「君、誰か呼びたいのがあるんなら、呼び給へ。」
福井さんは正雄に向つてかう言つた。
「え。」
と言つた時、正雄の胸は不思議に落ちついてゐた。
「會つて見たいと言ふやうな人があるだらう。それを呼ばうぢやないか。」
「ぢやあ、君太郎と言ふのを呼んで頂きませう。」
正雄は少しも悪びれずに、ずかりとかう言つた。
「新河内家のお酌だらう。へええ、妙な者がお眼に留まつたねえ。」
福井さんにかう言はれると、正雄は急に顔を染めた。
「君太郎さんなら綺麗ですわ。」
そこに坐つてゐた年増の女中がかう言つた時、正雄は萬人力を得たやうな氣がした。
「それに上品ですわ。おとなしくて。」
若い女中も側から助太刀をした。
福井さんは好奇心に驅られるといふやうな風で、左右の

手の平を擦り合せながら、

「こりや面白い。呼んで御覽、呼んで御覽。」

と言ふ。年増の女中は直ぐと座を立つた。やがて階子段の下の方で電話の鈴の鳴る音がした。

三つの盃を組むやうにして入れた盃洗と、眞白なお銚子と、鯛煎餅のお通しとがちやぶ臺の上に乘つた。龍井は直ぐと盃の一つの水を切つて、福井さんに差した。福井さんは手つきで正雄へ先に差すやうに命じた。龍井は又一つ盃の水を切つて、突と正雄の鼻先へ出した。

「ええ、令夫人君太郎孃の御健康を祝しませう。」

龍井の漢語の甚だ危なげなのを笑ひながら、正雄はおとなしく盃を受けた。龍井は正雄と福井さんに酌をすると、自分でも一つ盃を取つて、手酌の置注ぎと言ふのをした。

そこへ髪をハイカラにして、著物を端折つて來た小柄な若い藝者があつた。直ぐその後から、島田に結つて、裾を引いた、眼が大きくて、丈の高い二十二三の藝者が來た。この二人は福井さんの座敷にはいつでもきつと來てゐるので、正雄も顏は知つてゐた。唯いつもは年寄藝者の蔭に鼠のやうに小さくなつてゐる二人が、ここでは甚しく荒れ廻るのである。正雄はそれが不思議でならなかつた。

「まあ、先生、よく入らしてねえ。」

島田が蓮葉らしくかう言つた。

「先生の是非見たいと言ふのがあるんでね。」

島田の隣にゐる龍井がかう言つた。

「これで中々隅へは置けないのさ。女學生の方では大分經驗があるんだからね。」

と、福井さんが言ふと、

「あら、さう。」

と、福井さんの隣にゐる眼の可愛いハイカラが、びつくりしたやうに眼を剝いて言ふ。

「嘘だよ。莫迦。」

と、福井さんは窘めるやうに言つて、女の前に盃を出した。ハイカラは少し極りが悪いと言ふ風で、正雄に氣を兼ねながら酌をした。

正雄は口が利けなかつた。いつもの光景とは大分樣子が違ふ所へ、ひどく自分だけが中心になるやうな氣がして、如何にも場打てがしたのである。

それに「先生、先生。」と呼ばれるのも氣になつた。芝居の中で役者の言ふのは、まあ爲方がないとしても、ここの内では女中までが言ふのである。「何が先生なものか。先生がこんなに面喰つてどうするものか。」正雄は腹の中でかう思つた。

階子段に衣擦の音がしたかと思ふと、次の間から「こち

ら。」と言ふ可愛い聲が聞える。

年増の女中は次の間を覗くやうにして、「ええ、さうよ。」と言つた。それから、正雄の方を振返つて、「參りましたよ。」と、笑ひながら小聲で言ふ。

白地の絽に紫の菖蒲を染めた肩上げのある著物を著て、褪紅色に八つ橋を白く拔いた帶を締めた、髮の毛の黑く美しいお酌が、敷居に手の指を輕く突いてしとやかに挨拶をした。

顏を上げるのを見ると、正しく君太郎である。眼も鼻も口も、舞臺にゐるのを土間から見たのとは違つて、如何にもはつきりしてゐる。眼には黑く深い情を滿へてゐる。鼻には少しも誇らしげな角がない。口は如何にも感じが柔かで、それでゐて、何處にか挺子でも動かぬ情の硬さが見える。

正雄は强烈な光にでも會つたやうに、どうしても眞面に君太郎の顏を見る事が出來なかつた。抑へても抑へても胸が波を打つ。盃を手にすれば盃が震へる。

一座は暫く無言であつた。

福井さんも、龍井も、島田に結つた咲次と言ふのも、ハイカラに結つた花子と言ふのも、居合した二人の女中も、一齊に君太郎の顏をぢつと見た。俯向いてゐるのは正雄ばかりである。

「綺麗だわねえ。」

若い女中が先づ沈默を破つた。

「好い毛だこと。」

花子が次いでかう褒めた。

「上品ですわねえ。新河内家は子供の裝を見立てるのが餘つ程上手なんですねえ。」

年増の女中が福井さんに向つてかう言つた。

「厭ですわ。皆さんで。」

君太郎は顏も赤らめずに、少し太い聲でかう言ふかと思ふと、空になつたお銚子を持つて、すつと座を立つた。

「成程、藝術家は又藝術家だけの見立をするものだね。」

と、福井さんは輕く冷かすやうに言つて、

「だが、少し柄が大き過ぎる。」

と、叱るやうに附け加へた。

「好い子になりましたね。小さい時は隨分貧相な子でしたがねえ。」

龍井は年寄らしい調子で首を振りながら言つた。

「男好きがするのね。」

咲次は龍井の顏を見てかう言ふ。

「中々强さうね。」

花子は烟管をぽんと叩きながらかう言つた。

そこへ又君太郎が新しいお銚子を持つて來た。一座は又

ちよいと白けたが、今度は前程の事はなかつた。

「君ちやん、この方が大層御執心なんだよ。幾らかお出し。」

と、福井さんが正雄を指して言ふと、龍井は直ぐとその尻馬に乘つて、

「一圓、一圓。」

と叫つた。

君太郎は慎ましやかに笑つてゐるばかりである。

階子段の下から、「咲ちゃん、電話。」と疳走つた聲がする。咲次は直ぐと座を立つた。

暫くすると、「龍井先生、ちよいとお顏を。」と次の間から女中の聲がする。龍井は座を立つと、次の間で暫く女中と話してゐたが、やがて階子段を降りて行つた。

正雄は飲めぬ酒を無理に二三杯引つかけたので、顏が眞赤になつた。福井さんも大分好い機嫌で、下から運ばれる「お料理」を、側から片附けながら、少し鼻へ掛る寂のある聲で、首を振りながら端唄を唄ふ。

咲次も龍井も下へ降りたぎり上がつて來ない。やがて花子もゐなくなつた。福井さんもお皿やお椀を綺麗にすると、鼻歌を唄ひながら、何處かへ行つてしまつた。番の女中も消えた。

正雄は君太郎とたつた二人になつた。

「みんな何處へ行つてしまつたんだらう。」

正雄は情なささうにかう言つた。君太郎は默つて靜に笑つてゐる。

「僕の顏眞赤でせう。」

君太郎は笑つて頷いた。その頷きやうに正雄は妹か姉に見るやうな親みを見た。

「見つともないなあ。」

正雄は恥づるやうにかう言つて、座蒲團を自分で持つて、川に近い窓の側へ來た。窓から下を覗いて見ると、小さな庭があつて、飛石が棧橋へ續いてゐる。棧橋の袂に手入の屆いた靑い柳が細い枝葉を水の上に垂れてゐる。庭の隅には紫陽花が瑠璃色に咲いてゐて、龍井らしい笑ひ聲と咲次らしい笑ひ聲が、折々水に響いて聞える。帆を張つた舟が幾つも幾つも川下から登つて來る。水は西日を受けて金のやうに光る。

「ここへ來ませんか。好い風ですよ。」

正雄はやつとの思ひでこれだけ言つた。君太郎は少しも恥づかしがらずに、突と立つて來て、正雄の直ぐ前に行儀よく坐つた。桔梗の花を畫いた、塗骨の、小さな扇子を使つてゐる。半襟の絽縮緬にも桔梗らしい花が縫ひになつてゐる。

「君、桔梗の花が好きなの。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo